

日本ペンクラブ編

逢坂 剛

選

fukutake bunko お0101

ōsaka
gō

スペイン読本



福武文庫
お0101



スペイン読本

1987年11月10日 第1刷印刷

1987年11月16日 第1刷発行

.

編者——^{にほん}日本ペンクラブ

発行者——福武總一郎

発行所——株式会社福武書店

東京都千代田区九段南2-3-28

〒102 電話(03)230-2131

振替口座(東京)6-105097

印刷所——大日本印刷 製本所——加藤製本

装丁——菊地信義

©The Japan P.E.N. Club 1987

Printed in Japan

落・乱丁本はお取替え致します

定価はカバーに表示してあります

ISBN4-8288-3066-9 C0195

福武文庫

スペイン読本

日本ペンクラブ編
逢坂剛選



福武書店

目次

*スペイン案内

笠井 鎮夫 9 南方スペイン風物誌

樺山 紘一 51 カタロニア周遊行

逢坂 剛 79 永遠なるスペイン

*フラメンコ

栗田 勇 95 焰の舞踏・フラメンコ

小泉 文夫 113 アンダルシアの町、カデイス

勝田 保世 129 天国にもっとも近い国

*女一人……

岡田まさみ 163

舞踊の世界に入る

長嶺ヤス子 179

炎のように火のように

叶沢 敏子 199

エチエガライ女一人

*ジプシー

新居 格 225

スペインのジプシー

堀口九萬一 253

西班牙のジプシー

*内戦・第二次世界大戦

柏倉 康夫 273

ゲルニカの死んだ日

小松 清 315

極左的ファシズム

須磨彌吉郎

337

外交秘録

川成 洋

359

スペイン戦争と日中戦争

解説と解題

逢坂

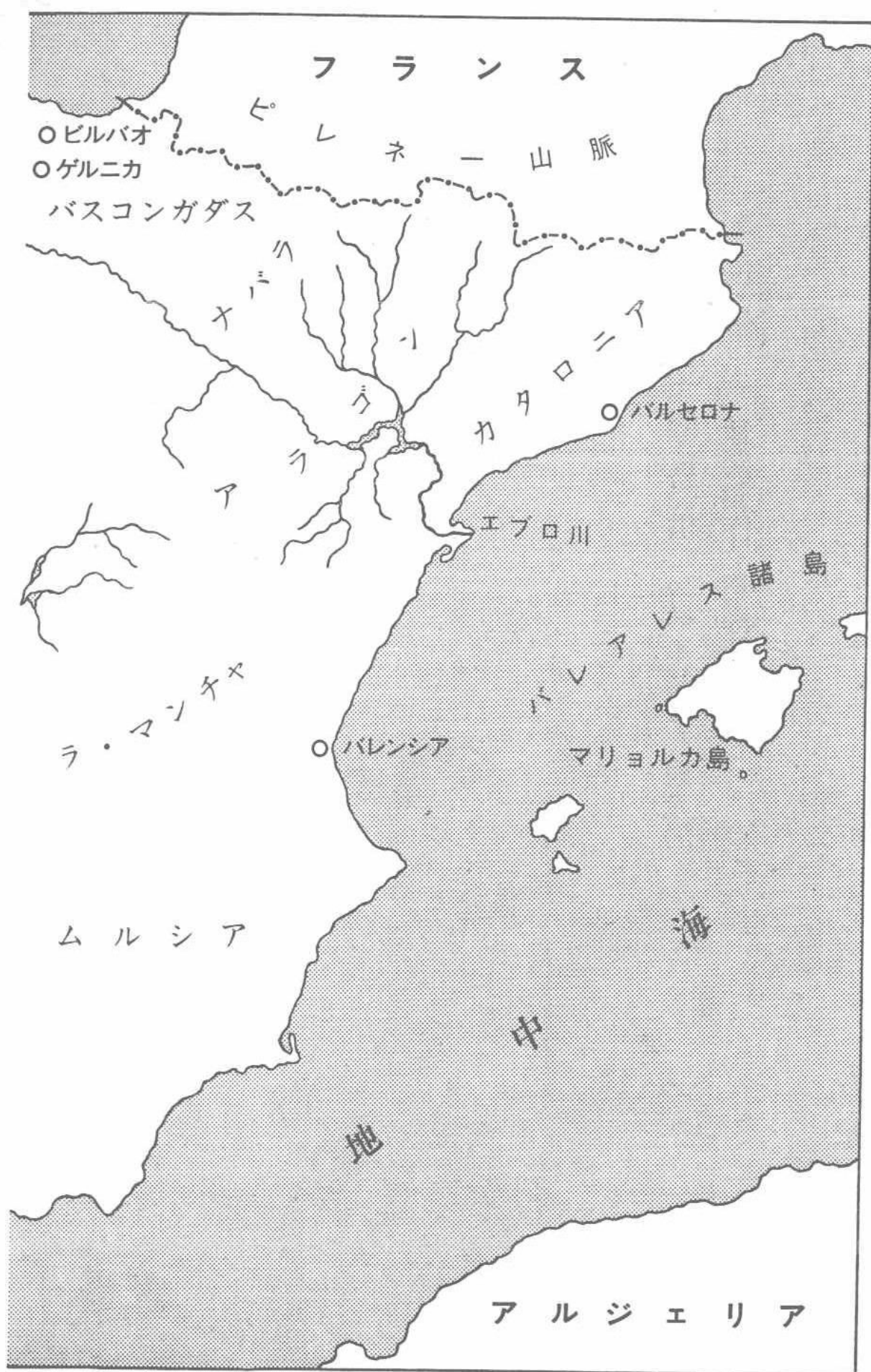
剛

写真提供

スペイン政府観光局

地図製作

相澤裕美





南方スペイン風物誌

笠井鎮夫

〈著者紹介〉

笠井鑛夫（かさい・しずお）

一八九五年、岡山市に生まれる。
東京外国語学校（現東京外国語大
学）スペイン語科卒業と同時に、
同校助教授として迎えられる。
昭和二年から三年にかけて、文部
省在外研究員としてスペイン・中
南米に留学後、同四年に教授とな
る。

主な著書に『スペイン語四週間』
『笠井スペイン語講座』、翻訳に
『バスク牧歌調』『海上を飛んだ胡
蝶』『スペイン綺譚』などがある。
本篇は『スペイン紀行』（東都書
房刊）に収められたものである。

聖ラ・セマナー・サンタ週祭

目が覚めると鐘が鳴っている。——というよりも、鐘の音で覚めかけているらしい。

窓から射し込む朝の光で、ベッドの上の白い蚊帳がぼんやりと浮んで見える。鐘の音にまじって小鳥の囀りが、非常に遠いところからでもあるように聞こえて来る。セビーリヤに來ていることをちよつと思ひ出したが、まだ睡いことおびただし。起きようかと思ひながら再び甘い眠りに落ちて行つた。

冬のアンダルシーアは二、三カ月前に一度見た。グラナダのアルハンブラ宮殿も、コルドバの回教殿堂も、このセビーリヤ（スペイン第四の都、人口五〇万）のアルカサル宮殿も、すでに知っている。しかし陽春のアンダルシーアの風光の美しさはまた格別であらう。のみならず、世界的に有名なセビーリヤの聖週祭（ラ・セマナー・サンタ）はどうしても見なければならぬ。そう思つて、パレンシアから歸つてまだ一週間しか経たないのに、マドリーの下宿を出たのが昨日四月一日の朝だった。

再び目が覚めたときはもう九時だった。相変らず鐘が鳴っている。何んという陽氣な響きだろう。そうだ、それはお祭り日の鐘だ。歡喜そのもののようなリズムだ。私も今

度は元氣よくベッドから飛び起きた。

軽い朝食^{あさげ}をすませた後、世界で第三番目の大伽藍^{カテドラル}（長さ二七八フィート、幅二五四フィート）へ行くつもりで往来へ出た。四月初めなのに日の光は日本では想像もつかぬほど明るくて、眩しいくらいである。どこからとなく漂うて来るオレンジの花の強烈な香りが鼻をつく。「光と花の都」とはよくいったものだ。

すでに勝手を知っている私は、その規模ローマのサン・ペトロ寺院とニューヨークのセント・パトリック寺院に次ぐこの大カテドラルの境内にはいり、「蜜柑樹^{バタイオ・デ・ロス・ナランホス}の中庭」を通り抜けて本堂の方へ行つた。天を指してそびえ立つこの荘嚴なゴチック建築は、いつ見ても一種の威圧を感じさせる。九つある門のうちの一つ「蜜柑樹の中庭の門」を潜つて中へはいると、湿気を帯びた冷たい空氣がひやりと頬を撫でる。老若男女の信徒たち絶え間なくはいって来ては、入口近くの聖水盤の水に指先をぬらして、胸のあたりで十字を切り、蠟燭の灯に輝く華麗な、しかし古めかしい礼拝堂^{カペーリヤ}十カ所の前を通る度ごとに、片膝を折つて礼拝してゆく。

薄暗い五つの身廊^{ナーベ}を取り巻く数多くの柱の力強さ！ それに刻み込まれた縦の太い線条と、天井を支える無数の曲線とが表わす簡素な美観は、打ち仰ぐ人の心に莊重な氣分を起こさせないではおかぬ。

ミサはもう始まっていた。中央祭壇の周囲には数知れぬ信者が、ある者はベンチに腰をかけ、ある者は立ったまま、いずれもうなだれて、敬虔な面持^{おももち}でミサを拝聴してい

た。

莊嚴なパイプオルガンの響きに和した数十名の聖歌僧の合唱の聲が、広い堂内をこめた後、高い天井へ昇ってゆく。

長さ一丈に及ぶ途方もない二本の大蠟燭を初めとして、大小とりどりの蠟燭の灯に照らされた華麗な中央祭壇の前には、色さまさまの法衣アレトを身にまとった僧侶たちがミサを勤行こんぎょうしている。その周囲に立つ八、九歳の小坊主が振り動かす香炉や、そこに据えつけられた大きな香炉盤から立ち昇る紫煙は僧侶たちの身を包み、蠟燭のゆらめく灯にからみつつ、縷々として天井のバラ窓を指して静かに昇ってゆく。

またしても起こるパイプオルガンの響き。それに和する讃唱の聲。そのおどそかな震える音律とゆらめく香煙とが高い天井をさし昇ると、そこからは、あたかもそれに応じるかのように、色とりどりのガラス窓を透して虹のような麗わしい光線が薄暗の中を斜に射し込んで来る。何んという美しい光景であろう！ そう思つて、しばらく天井を見上げていたとき、私は、ふと、高い高い天井の近くに、ある生き物の動きを認めた。こもりか、鳩か、それとも、外から飛びこんだ燕つばめか、薄暗うすくらくてよく見分けがつかなかったが、高いところを一回りした後、どこかへ飛び去った。

ミサの読経どきぎょうの聲はますます高く、無数の灯は静かに輝き、香煙はいつまでもゆらゆらと天井に向かって昇ってゆく。

広い堂内を忍び足で一周した私は、やはりそういう態度で歩いている信徒たちの間

に、ベデカ旅行案内書とコダックを携えた外国人観光客の群に幾度も出逢った。

薄やみの世界から急に外へ出ると、強い日光で目が眩むばかりである。爽やかな微風がオレンジの花の香ばしい匂いを絶えず送って来る。黒の絹衣をまとい、同じく黒のマッテイーリヤ（被衣）^{かづぎ}を高櫛^{ベイネータ}の上から冠ったセビーリヤ女たちの白い顔が、次ぎから次ぎへと、十五世紀建立のこの巨大なカテドラルの中へ吸い込まれるようにはいつて行つた。

行列と頌歌^{サエータ}

聖週祭が一週間にわたることはない。その間じゅう、カテドラルや教会で、毎朝ミサの儀式が挙げられ、午後になると「輿^ぶ」の行列がほとんど全市にわたって行われる。セビーリヤ市の各教会には必ず一つの「受難のキリスト像」がある。いずれも、当市生まれの天才彫刻家マルティーン・モンタニェス（一五六六—一六四九）の如き名匠の手になる立派な芸術品である。平素は教会内に保存されているが、聖週祭の間だけ行列のために講社^{コフラデイア}にかつぎ出されるのである。街まちをかつぎまわった後、皆カテドラルへ集まる仕組になっているのは、日本のおみこしのしきたりと比べて興味が深い。

全市の教会は数多くて、数十の講社の興^{ウキ}が毎日出るわけにいかぬ。月曜日は何々講社と何々講社というふうに順番がきまつているのだが、特に木曜日の夜から金曜日の夜明けにかけて行われる行列こそ最も有名なものである。この夜セビーリヤの一般市民は、盛大な行列に加わるため、またはそれを拝むために、徹夜するのが普通である。

その木曜日の夜、私は行列を見るためにホテルを出た。セビーリヤ市で最も有名なラス・シエルペス街（蛇通り）という、その名の如く曲りくねった狭い通りへ行つた。たいへんな人出でほとんど身動きもならぬ群集の間を、聖週祭の日日の行事プログラム、その他祭りに関する小冊子の呼び売り商人が、人波を掻き分けて右に左に泳ぎ回っている。この大群集の中に混じつて、紫、白、黒、その他色さまざまの、裾は地にまで届く長い長服^{トウニカ}を着、両眼の前だけを残して顔全体を掩うた高さ一メートルほどの異様な尖帽^{ローテ}を冠り、長い杖を携えた人びとの群に出逢つた。これはナサレーノ（ナザレびと）と呼ばれ、行列に加わつて輿の前後を護衛して街まちを練り歩く連中である。キリストを迫害するローマの兵に扮して甲冑に身を固め長い槍を携える者もあつた。

セビーリヤ全市にはこういう人びとが組織する講社^{コフラデーア}が数十あつて、その組合員のあつる者はみこしをかつぎ、ある者はみこしの前後につくナサレーノの役をつとめるのである。なお、聖週祭の間は女たちの服装もまた古風にかえり、街をゆく彼女たちは黒の絹衣をつけ、高櫛の上に黒のマンティーリヤをかぶるのが常である。

私はこういう大群衆を押し分け押し分けして、すべての行列が必ず通過せねばならぬ